二種類の活用のある動詞について

木　之　下　正　雄
Masao KIMOSITA

源氏物語で同一語を両様に活用している動詞の中には次のようなものがある。

a　意味は同じであるが，附く語が違つているもの。

忘る　四段・下二段ともに他動詞で意味も同一である。万葉集時代のワスラはユ・ル・敬語のスに連なつた。ムにも連なつた例があるが，万葉時代はムはワスレに附くのが普通であつた。ズはワスレに附いた例だけである。源氏物語では，四段は忘ラルの形だけで，ルは必ず忘ラに附いた。サス・ム・ズ・ジデは忘レに附いた例ばかりである。忘ラルという固定した形が下二段忘ルの受身可能の動詞として用いられたのであつて，四段活用としての生命は失つていた。この事は当時一般的にもそうであつた。いかにぞや名乗其かと問はむにも忘れる里や蜑は告げまし（斎宮集）は珍らしい例である。他動詞忘ルが四段と下二段とに用いられるのは，このように附く語の違いによるのであり，その使い分けははつきりしている。

下二段忘ルには，他動詞の他に，対象が，格になつている例がある。

かの母君のあはれに言ひ置きし事の忘れざりしかば（藤袴164。ほかに東屋33・手習269――対校源氏物語新釈のページ数。以下同じ）

源氏物語には忘ラルと下二段忘ルとが伝本によつて異なる例が多い。「つらさも忘られて」（賢木423）は河本では「忘れて」になつている。かかる例は「思す」と「思さる」その他多い。主格や目的格の標本を省いてもよい日本語では，受身や可能で言う事柄が他動の立場からも言える。それで同じ事柄を表わすというだけでは下二段忘ルが受身可能の意味を持つていたという証にはならない。しかし上の3例は異伝がない。忘ラルの写し誤りであるのか受身可能自発を意味する下二段の忘ルがあつたのか明らかでない。もしかかる動詞があつたとすれば，下二段忘ルには全然活用を同じくする自動詞と他動詞とがあつたことになる。

要するに「忘る」が両様に活用するのはルの附いた忘ラルが固定して伝統のままに用いられたためである。それは，発生事情は違うが，口語の「する」に四段的のサレルと上二段的のシナイの両活用があるが決して混用されることはないのに似ている。

b　意味が異なるために活用が異なるもの。

しのぶ　奈良時代には，「しのぶ」「隠・耐―上二段）と「しのぶ」（偲―四段）の二つに分かれるが，源氏物語では，耐ぶ・隠ぶ・偲ぶの三つの語に分けるのがよい。

（1）**耐ぶ**　未然形バ　15例。ズ・ム・ルに連なつた例がある。連用形ビ，終止形ブ。連体形ブル2例，会話だけ。已然形ブレ5例。命令形は見当らない。このように活用して紛れがない。未然連用終止は四段に同じで，連用終止連体已然は上二段に同じで，四段と上二段の混合型である。命

令形は不明であるが，結果としてはナ変と同じである。ナ変は死ぬ・往ぬ・ぬに限られているように言われるが，同じ型の活用は実際の生活言語の中にはあつたわけである。なるほど個人の言語であり，発生的にも四段と上二段との混合型であり，後世のものでもある。しかし平安時代の語法を考える際に，平安時代の発生であるからと言つて「死ぬ」と差別すべきでない。「蹴る」の方は下一段に認めている。四段と上二段との混合ということについても，一つの語の活用をきめるのに発生にさかのぼつて分解するのは正しくない。ナ変にしても国語の原初から存在したという証拠はない。むしろ語数の少なさから考えて，四段と上二段の混合型と考える方が穏当である。個人の言語ということについても，紫式部一人だけの癖ではない。多少の動揺はあつたにしても，当時の宮廷の人たちの主な使い方はナ変型であつた。詞の八衢に「上二段のしのぶは四段にも活きて意は全く同じ」とあるが，実際に存在するのは個人の言語生活であり，個人を抜きにして直ちに社会全体を論ずるのは正しくない。また活用体系を考える場合に，稀な用法と主な用法とを無差別につきまぜて別の系統に再構成すべきでもない。紫式部は勿論，当時の宮廷の人たちのシノブの主たる活用型はナ変型であつた。ナ変という名前も四段変格活用と呼ぶ方が合理的である。

（2）**隠ぶ**　自動（隠れる）と他動（匿す）とがあるが，活用に変りはない。未然形バ1例，ビ3例。

何の惜しげある身にてかをこがましう若々しきやうにはひきしのばむ（夕霧272）

「ひきしのびむ」となつているのもあるが，青本・河本は「ひきしのばむ」となつている。湖本ではバはこの一例だけであるが，伝本によつては他にもある。「しのびさせ給ひける」（若紫180）は河本には「しのばせ」となつている。ビの例は上の若紫の例の他に

隠れ惑はさむとも隠れしのびず（帚木55。他に浮舟100，紫式部日記377一有明堂）紫式部が両様に活用したのか，書写の時代の影響を受けているのか明らかでないが，ビの方が用例も多いし，異伝のない例でもあるし，また帚木と浮舟とは会話の例でもあるので，紫式部はビの方に用いるのが普通であつたと思う。ただ，社会全体としては未然形からさきに動揺し始めたということが言えよう。他の活用形はビ・ブ・ブル・ブレで少しも混同はない。このように「耐ぶ」と「隠ぶ」は意味だけでなく活用も別になつている。別語になつていると認むべきであつて，同一語を両様に活用したとは言えない。

（3）**偲ぶ**　未然形バ　11例，連用形ビ，終止形ブ4例，連体形ブ2例，ブル2例（他に紫式集に1例，日記に1例）已然形・命令形は源氏にはない。

偲ブルは歌だけに用い，歌では常に偲ブルを用いているので，歌語として意識されたものと見える。偲ブは，会話と地の文とに用いられていて，話し言葉としては偲ブであつた。「偲ぶ」は本来四段であつたから，偲ブルは歌の世界だけに生じたものであり，平安後期の歌に偲ブが多く用いられているのは，日常語と遊離した偲ブルが歌の世界でも支えきれなくなつたのであろう。

「昔をしのぶひとりごとはさても罪許され侍りけり」（横河181）

（娘ヲ）恋ひしのぶ心なりければ（手習256）手習の例は，青本の一部と別本の一部とがシノブで，

他はシノブになつているが，上述の理由でシノブに従うべきである。

人知れぬ心をかけてしのぶをば忘るとや思ふ手枕の袖（和泉式部290—有明堂）は岩波文庫本に従つて「隠ぶるを」と解すべきである。

要するに紫式部は，歌語としてはバ・ビ・ブ・ブルのように「耐ぶ」と同じく四段変格に活用し，日常の話し言葉としては四段に活用した。それは歌と散文という場のの違いによるのであつて，それぞれの場においては混用はなかつた。

わく　四段と下二段とがあるが，下に附く語の違いでもなく，また歌と散文との違いでもない。両者の間には意味の違いや使い方の慣習があるのである。

（1）　一つの物を幾つかに分割する意味の場合は下二段である。「草を分けて」「露を分くる」「かたへづつ分けむ」（松風213）。しかし「野を分く」は例外で常に四段である。そのように言う習慣が成り立つていた。現代でも「木を割く」の場合だけは四段でいう習慣である。「方分く」（若菜下1）も四段に言う習慣であつたようである。「心を分ける」（他の人に愛情を分ける）も下二段である。（澪標117，蓬生161）

塵ばかりも心わく方なくやあらまし（若菜上322）

は青本の大部分・河本の「分くる」に従うべきである。

宮城野の小萩がもとと知らませば露も心を分かずぞあらまし（東屋59）

は諸本一致しているが例外である。

（2）　分担する意味も下二段である。（少女350，少女353，若菜上341）

（3）　分け隔てをする意味の「思ひ分く」は下二段である。

これを他人と思ひ分けたること（東屋10。紅梅371）

しかし同じ意味の「心を分く」（椎本50，総角120）は四段である。愛情を分ける意味と言い分けるためであろうか。

隔てるというのでなくても，分ける。区別するに重点がある時の「思ひ分く」は下二段である。

六条院の御ため紫上など皆それぞれ思し分けつつ御経仏など供養ぜさせ給ひて（蜻蛉204）

分ける意味が軽くて，区別して思う・識別する意味の場合は四段である。

他人と思ひ分き給ふまじきさまに（総角126。早蕨200）

（4）　弁別する・判定する・判断する・多くの中から特に一つを取りあげる意味の場合は四段である。（紅葉賀307，明石88，胡蝶31）この場合「心」をつけると「心に分く」と言う。

今はなどか何事をも御心には分い給はざらむ（胡蝶34）

他人の心を弁える意味も四段である。

おそく疾き花の心をよく分きて（幻327）

「二人をのみぞこの御方に言ひ分けたりける」（手習253）も大部分の本に従つて「言ひ分き」とすべきである。

「特別に」の意味は「分きて」と言つて例外がない。

わけて問ふ心の程の見ゆるかな木蔭をぐらき夏の茂みを（更級63—岩波文庫）

は「特別に」と解すべきでなく，宮田和一郎氏が疑つている通り，茂みを分けて問ふと解すべきである。

（5）悟る・理解する・識別する意味の「思ひ分く」は四段である。（梅枝227，若菜上278，同348，夕霧275）

（6）自動詞に解すべき例もある。その場合は四段である。

同じかざしを尋ね聞ゆれば忝けれど分かぬさまに聞えさすれば（若菜上339）

以上，分クには四段と下二段とがあるが，その使い分けは意味の違いによるが，また言語慣習にもよる。そして僅かな例外を除けばその慣習はよく守られていると言える。

c　自他の違いによつて活用が異なるのは多いが，言語慣習が自他の違いと一致しなかつたり，後世自他の違いが分らなくなつたために，同一語で両様に活用すると思われている語もある。

亂る　四段は他動詞で下二段は自動詞である。四段の乱ルが源氏で「心を乱る」の例だけなのは偶然であろう。「言ひ乱る」（言うて邪魔する），「書き乱る」「吹き乱る」の例があるからである。しかし次の場合は自動詞であつても四段である。

（1）かき乱る「心地のかき乱り悩ましう侍るを」（総角98）のように心地の場合だけに用いてある。「雪霰かき乱れ荒るる日に」（澪標138）は心地に用いてない唯一の例であるが，青本の大部分・河本の「かきたれ」に従うべきである。心地の場合は「かき乱る」を用いるが，次のように「乱る」を用いた例もある。その時は下二段である。

乱り心地とかく乱れ侍りて（柏木14）

（2）病気の場合は「乱り心地」「乱り風邪」のように四段である。

（3）形容詞の場合も「乱りがはし」と言うが，必ずしも他動詞的な心持ではない。これらはそのように言う慣習が成り立つていたのであろう。

下二段の乱ルは自動詞の場合だけである。分クや乱ルの両様の活用は意味の違いや自他の違いによるが，また言語慣習にもよる。言語生活においては，意味の違いや自他の違いよりも，言語使用の慣習の方がより直接的である。慣習の成立には意味や自他が深く関係するけれど，一般的な意味を超えた慣習も成立する。「家を建つて」という言い方などしばしば聞く所である。そして慣習は言い方を一定にするので，同一の事柄をある時は四段に他の時は下二段にというようなことは殆どない。

垂る　四段は自動，下二段は他動に使い分けてある。

奉る　四段は他動，下二段は使役に使い分けてある。同一の意味で両様に活用しているのではない。（研究紀要2巻参照）

d　写し誤りのために両様に活用すると思われているものもある。

おはす　古くはサ変とされたが，山田博士は四段と下二段の両様に活用すると主張された。その例にあげられたのは

大宮の御世も残り少なげなるをおはさずなりなむのち（少女341）

であるが，詞の八衢がおはせずとあるのがよいといつている通り，校異源氏によると古写本はすべて「おはせず」になつている。「おはさう」「おはさうず」も四段の例にあげられるが，山口栞に指摘してあるように「おはさうず」は肥前の事実を述べる例だけである。また命令や過去もあるので，意味や語源については研究の余地がある。従つてオハスの未然形がサであつたとはきめられない。紫式部はサ変に活用して例外がなかつた。

あひしらふ　四段である。「昔のやうにもあひしらへ聞え給はず（横笛189）「あへしらへなどし給ふ」（澪標124）は河本の四段活用に従うべきである。

さすらふ　「あるまじき様にさすらふたぐひ」（総角113）を大言海に四段の例に引いてあるが，河本の「さすらふる」に従うべきである。

e　不明の語もある。

のたまふ　「姉なる人に宣ひ見む」（帚木84）を，島津久基博士は河本の「宣へ侍らむ」に従うべきであると説いている。その証として「宣へ語らはむ（宇津保上47—有明堂）を引いている。源氏にも「斯く宣ふるがつつましうて」（常夏85），「らうたげにも宣へなす姫君かな」（夕霧278）の二例があるが，校異源氏によると湖本の写し誤りである。しかし宇津保にも「のたまへむ」（下627）があつて，下二段宣」がなかつたとは断定できない。

呆く　下二段に用いるが，「ほきたる事」（常夏81）の例がある。下二段と意味が違うかどうかも不明であるし，活用も大言海に四段としてはあるが四段か上二段か不明である。

漏る　下二段としては「この度の司召にも漏れぬれど」（賢木434）の一例がある。河本の大部分は「もりぬれど」になつている。他動詞に解することのできる所であり，その方が自動四段に対して都合がよいが，他動には「漏らす」を用いるのが普通であつた。写し誤りかも知れないが不明である。

f　場の制約や癖や言い誤りによるものもあろう。現代でも同一の人が「借りない」「借らん」と両様に話すのを聞くが，それは無軌道ではなく，標準語的雰囲気・方言的雰囲気という場の認定による。紫式部は標準語と方言との二重言語生活はしなかつたと思われるので，場の制約は歌と散文の場合だけであつたろう。

「なけらねばならない」と言う癖の人がいるが，ことばに対してこまかい感覚と深い教養とを持つていたのであるから，十分考えて書いた源氏にはかかる誤りの癖はなかつたであろう。また日常の談話に見られる不用意な言い誤りも源氏にはなかつたであろう。要するに洗練された標準的な文章であつたろう。

このような文章の中で二種類の活用があるということは，どちらに活用してもよいというような無軌道なものでなく，ある場合にはある活用に限るといつたような性質のものである。その使い分けの基準となるものは，意味の違いや慣習や場の制約などである。この小論は紫式部個人のかかる使い分けの基準を考えたのであるが，紫式部の占める位置から考えて，その基準は平安時代の言語においてかなり高い位置を与えてよいであろう。

（27年8月「源氏物語の語法」から抄出補筆）